

18 : LHサーージ直前の排卵前卵胞の吸引とその後の継続的な卵胞吸引による黄体不在の延長を利用した卵胞囊腫作出モデルの開発、ならびに、作出したモデルにおける発育過程の囊腫卵胞の研究

臨床獣医学研究部門 松井 基純

メールアドレス mmatsui@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

LHサーージ直前に排卵前卵胞を吸引することで引き起こされる、黄体不在の状況が卵胞発育に及ぼす影響を中期的(2から4週間)に観察するとともに、黄体不在の延長による卵胞囊腫化の仕組みを明らかにし、卵胞囊腫作出モデルの開発を目指す。また、作出されたモデルにおいて、卵胞の発育過程で吸引し、その卵胞の形態や生理学的な研究を行う。

【方法】

プロスタグランジン F2a 投与による黄体退行誘起から 36-42 時間後に超音波診断装置を用いて排卵前卵胞を吸引し、その後3日毎に超音波診断装置による卵胞発育の観察と血中ホルモン濃度を測定のための採血を行う。また、最初の卵胞吸引から、3、6および9日後に卵胞を吸引し、黄体不在を延長し、卵胞発育の観察を行う。

【結果】

最後の卵胞吸引から、5、7および9日後の黄体の存在しない状況で発育した卵胞(モデル群)のサイズは、自然排卵後の黄体存在下で発育した卵胞(対照群)より大きかった(図1参照)。卵胞液中のエストロジェン(E2)濃度は、モデル群で有意に高かった(図2参照)。卵胞液中のフリーIGF-Iは、モデル群の9日後の卵胞で高い値を示した(図3)。

図1. 卵胞の平均直径

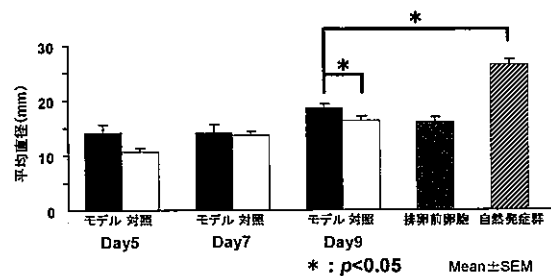


図2. 卵胞液中E2濃度

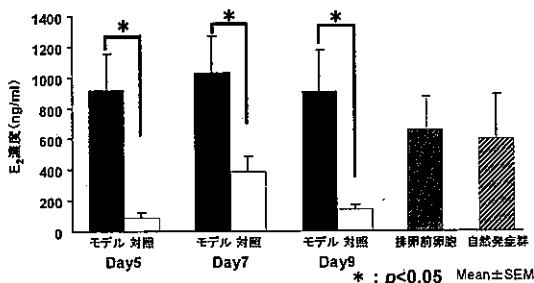


図3. 卵胞液中フリー IGF-I濃度

